

ソーシャルワークにおけるネットワーク ネットワークと連携の關係に着目して

立命館大学大学院 柴田 知成 (8088)

キーワード：ネットワーク・連携・ソーシャルワーク

1. 研究目的

ネットワークという用語は、様々な分野で使われている。コンピュータや電子回路などにもネットワークという用語が使われている。ソーシャルワークの分野においても、ネットワークという用語は「ネットワークによる連携と協働」や、「ネットワークを活用しての支援」など、頻繁に使われている。一方で同じような文脈で使われている用語として「連携」がある。

近年のわが国のソーシャルワークの動向の一つとして、「地域を基盤としたソーシャルワーク」という流れがある。この「地域を基盤としたソーシャルワーク」の特徴の一つは、地域でのクライアントの生活を支援することにある。生活にはまさに広範なニーズが存在し、それらに対応するためには、ネットワークや連携が必要となってくるのである。

しかし、ネットワークについてはソーシャルワーク実践において混乱しているとの指摘がされている。これらはネットワークという用語が整理されないままに実践領域で使われていることに起因していると考えられる。そのため、本研究は、ソーシャルワークにおけるネットワークについて、連携との關係に着目し考察することにより、実践領域における混乱解消の一助とするものである。

2. 研究の視点および方法

Ciniiにおいて、「ネットワーク」及び「連携」で検索した論文及びネットワークに関する書籍のうち、概念や構成要素についての記述があった論文のレビューを行った。

3. 倫理的配慮

レビューした論文について、剽窃が無いよう引用元を明らかにし適切に引用を行った。

4. 研究結果

ソーシャルワークにおけるネットワークの概念は、論者によって定義が異なる。ネットワークが構造である、と定義する論者もいれば、構造と機能の両方を包含した概念である、と定義する論者もいる。例えば、「社会福祉用語辞典〔第6版〕」(2007、ミネルヴァ書房)では、ネットワークを「可変性の高い網目状の人間関係と、それらが果たす機能の両方を

指す。」と定義している。一方で川島(2008)は「多様な主体間の関係性の構造を表す用語にはネットワーク(中略)をあてることが妥当であると思われる。」と述べている。いずれの論者もネットワークを、個人や組織のつながりの関係性を構造と定義している。機能としては、構造を維持するためのもの、または構造自体が発揮するもの、として定義されている。

また、連携の概念も多義的であり、研究についてもまだまだ不十分、との指摘もあるが、山中(2003)は「援助において、異なった分野、領域、職種に属する複数の援助者(専門職や非専門的な援助者を含む)が、単独では達成できない、共有された目標を達成するために、相互促進的な協力関係を通じて行為や活動を展開するプロセス」と定義している。

ネットワークや連携は、クライアントの生活を支援するためには単一のニーズの解決を図るだけでなく、広範なニーズに対応する必要があり、そのための方法論として頻出している概念である。この2つの概念は論者によって、同じ意味内容として使われている場合も多く、厳密に使い分けがされているとは言い難い状況にある。

ネットワーク分析において安田(1997)は、ネットワークは社会構造であるとし、構造とは「行為者の間の関係がパターン化されたものが、時間的にみても比較的長いあいだ安定して存在している」としている。そして「ネットワークとして捉えた行為者の周辺の構造が、行為を決定する重要な要因になっている」と述べている。また、構造を支えているのは行為である、とも述べており、構造と行為は相互関係にあると言える。

これらをソーシャルワークにおいて考えた場合、ネットワークを構造、連携を行為として、捉えることができるのではないか。例えば、援助方針を決めるために会議を開催する必要に迫られた時に、参加者との間に信頼関係や開催のためのルールなどがあると、会議を開催すること自体は難しくない。逆に信頼関係や開催のためのルールなどがない場合は、会議の開催自体を躊躇することとなる。また、会議の開催を重ねることにより、信頼関係などが構築され、会議の開催が容易に行えるようになることもある。

つまり、ソーシャルワーカーを取り囲む構造としてのネットワークが、行為としての連携に影響を与える重要な要因になり、また行為としての連携が繰り返し行われる事により、構造としてのネットワークができるのである。

ネットワークを構築する際には、連携が円滑に行われる要素が組み込まれたものでなければならない。また連携を行う際には、常にその連携が効果的な支援となっているかを検証し、その結果をネットワークへフィードバックする必要があると考えられる。

今後の課題としては、円滑に連携を実施するための要素は何か、また、それらの要素をどの様にしてネットワークに組み込むのかを明らかにしていかなければならない。そして、それらの知見に基づいて、ネットワークや連携により、より効果的な支援が行われるようにしていくことが必要である。